

宣言されるまでの時間は極めて短いと言わざるを得ない。これが如何にして可能になったのかは、本書で奴隷制とイスラーム社会との不可分な関係を理解すればするほどに生じる疑問である。

ただ、この疑問は本書に対する疑問というよりも、本書から派生した疑問であるといえよう。そこで、願わくは、本書の増補版がほしいところである。著者には、学術書の体裁で、よりじっくりと奴隷制とイスラーム社会との相互関係を論じていただきたい。

<参考文献>

清水和裕 2005『軍事奴隷・官僚・民衆——アッバース朝解体期のイラク社会』山川出版社。

Campbell, Gwyn. 2004. "Introduction," in Gwyn Campbell (ed.), *Structure of Slavery in Indian Ocean Africa and Asia*, Portland: Franc Cass, pp. vii–xxxii.

Stanziani, Alessandro. 2013. "Labour, Coercion, and Economic Growth in Eurasia, Seventeenth-Early Twentieth Centuries," in Alessandro Stanziani (ed.), *Labour, Coercion, and Economic Growth in Eurasia, 17th-20th Centuries*, Leiden: Brill, pp. 1–26.

(鈴木 英明 長崎大学多文化社会学部准教授)

高橋圭『スーフィー教団——民衆イスラームの伝統と再生』(イスラームを知る 16) 山川出版社 2014年 106頁

神に至る道を探求する思想運動たるスーフィズム、教団員が神に至る道を進むべく共に宗教実践に励む集団たるタリーカ(スーフィー教団)、そして、人々が神に選ばれし聖者に願望の成就を託す実践たる聖者崇敬。これらは、イスラーム世界において、超越的で一なる神と世界内存在である人間とが社会の中でいかに結びつこうとしているのかを考察する上で重要な鍵となる。

本書は、上記3つの中でもとくにスーフィー教団に焦点を当て、それがムスリム社会において有している意義と役割について、その誕生から現代に至るまでを時系列的に追いながら解説した入門書である。

日本語で読むことのできるスーフィズムおよびタリーカ(スーフィー教団)の歴史をまとめた文献としては、東長による各論攷[東長 1993, 2010a, 2010b]やザルコンヌによる概説書[ザルコンヌ 2011]などがあるものの、まだまだ寡少であると言わざるを得ない。また、副題にある民衆イスラームとの関連で言えば、本書に先行して出版された『民衆のイスラーム——スーフィー・聖者・精霊の世界』[赤堀編 2008]では、聖者崇敬や聖遺物信仰などを中心に豊富な事例が紹介されているものの、タリーカを真正面から扱っている章はない。そのため、本書は既に紹介されている民衆イスラームにかんする事例を補完し、「民衆イスラーム」像の外延を広げる役割を担っている。以上を踏まえると、本書はスーフィズム(とりわけ、スーフィー教団)と民衆イスラームの両者を一挙に把握できる、まさに一石二鳥の書と言えよう。

本書は、「民衆のイスラーム」と題する前書きに加え、以下の5章からなる。

- 第1章 スーフィー教団の成立
- 第2章 ムスリム社会のなかのスーフィー教団
- 第3章 イスラーム改革運動とスーフィー教団批判
- 第4章 近代国家とスーフィー教団
- 第5章 現代スーフィー教団の再生

第1章では、スーフィズムの誕生からスーフィー教団の成立までを、とくに9世紀半ばから13世紀に焦点を当てて概観している。

スーフィズムはその誕生当初からウラマーによる批判を受けることも少なくなかったが、11・12世紀頃には宗教諸学の一分野としてスンナ派正統教義の中に確たる地位を占めるに至る。そして、続く12世紀から

13世紀にかけて大きな変革期を迎えた。すなわち、「特定の導師を開祖とし、その修行方法を継承するスーフィーたちの流派」(p.16)が形成されたのだ。また、この流派の多くは、流派の継承を保証する「教団」という形で組織化されていく(pp.20-21)。こうして、修行論や儀礼様式などを継承する教義としての「流派」(例えば、カーディリー派)と流派名を冠した社会集団としての「教団」(例えば、カーディリー教団)が、まさに「表裏一体」(p.21)となって発展していくのである。

ただし、組織化されたといえども、前近代における教団は分権的で、分裂を繰り返しながら各地へと拡大していった点(pp.24-25)や、人々にとって「流派の学習・継承と教団への所属がかならずしもイコールの関係では結ばれない事例」(p.21)を紹介し、組織化=集権的な団体、流派=教団という短絡的なイメージを読者が抱かないよう、適切な配慮が加えられる。また、各政権がスーフィー支援を行う背景には、教団を取り込んで「支配の円滑化をはかるといふ強い政治的な意図があった」(p.15)という指摘を行い、スーフィー教団が宗教的側面だけでなく、時の政権との不可避な関係の中で発展を遂げた点にも注意を促す。このように、スーフィー教団を取り巻く情勢を多角的に説明しているのも本書の特徴のひとつと言える。

第2章は、前近代におけるスーフィー教団の実態を、とくにオスマン朝期のエジプト(16~18世紀)において教団が果たした社会的役割に着目しながら描出する。

スーフィー教団は「修行者だけでなく一般の人々も参加する」(p.27)性格を有しており、とくに、一般民衆が現世利益や来世での救済を願う聖者崇敬を通して、多面性を獲得していった。つまり、修行を実践したり、内面の修養を行ったりする団体という従来の役割に加え、聖者の奇跡や取りなしによって聖性に浴することが出来る場ともなっていく。

著者は、人々の日常生活に着実に根を下ろすに至った教団が果たした役割について、祝祭・社会的結合・教育・女性・政治という5つの切り口から考察する。たとえば、教団が主催する祝祭は、聖者を讃える儀礼を行うといった宗教的側面だけでなく、市場の開催や娯楽の提供という非宗教的な側面も合わせ持つ。人々が大笑して押しかける、いわば非日常的な祝祭は「社会的な規範や秩序が一時的に取り払われ(中略)、社会の多様な層に属する人々を接合することで、共同体の秩序を維持・強化する」(p.39)働きを担ったのだ。また、政治的には、「民衆からの絶大な支持を背景に、為政者に対しても強い影響力をも」ち(p.45)、政治問題の調停を行ったほか、ときに民衆の側に立って為政者に批判を加えた。こうした教団の多様な役割を説明することで、著者は「エリートと民衆との間に立ち、両者を接合する媒介者としての教団の存在意義」(p.46)を浮き彫りにしている。

スーフィー教団が人々の生活に広く浸透していた前近代に対し、近現代に入ると教団への風当たりはその厳しさを増す。とりわけ19世紀以降に高まりを見せた教団への批判を、イスラーム改革運動との関わりの中で考察したのが第3章である。

スーフィー教団批判は、決して近現代特有のものではなかった。前近代では、原典への回帰を目指す運動の一端として、祝祭などに付随する娯楽性や、祈願と儀礼に見られる民衆の逸脱的な行為が批判された(pp.48-50)。また、批判者の多くは「自らもスーフィーであった」(p.51)ため、倫理面を強調する「エリート・スーフィーによる民衆的な信仰に対する批判という構図で理解されるべき」(p.51)だと筆者は説く。

一方、近代のイスラーム改革運動は、西洋諸国によるイスラーム世界の植民地支配、西洋近代の思想や価値の流入に伴うイスラームの衰退や崩壊に対する危機感を背景として登場した。近代的な思想を受容した知識人をその新たな担い手として、前近代の原点回帰運動を継承しつつ展開した改革運動は、「イスラームの教義や制度を近代社会に適合したものへと刷新する」(p.54)ことを目指す。著者はこうした改革思想に基づく教団批判の事例として、とくにムハンマド・アブドゥーとラシード・リダーという2人の思想家を取り上げている。

アブドゥーはサラフィー主義の立場から流派の正統性や教団導師の権威を問い直し、スーフィーが継承してきた教えの見直しを迫るという形で教団批判を行った点が特徴的だと筆者は述べる。他方、リダーは神秘主義にかかわる思想や実践を誤った教説と見なして否定し、スーフィズムや教団の存在意義を厳しく問うた。彼らの見解は「当時の知識人たちの総意であったとは考えにくい」(p.65)ものの、ムスリム同胞団の創設者ハサン・バンナーをはじめとする次世代の改革思想家たちに引き継がれ、最終的には「教団の存在意義そのものを問い直す今日の状況」(p.52)を生み出す端緒ともなったのである。

第4章では19世紀のエジプトを舞台に、スーフィー教団と近代国家の関係が論じられる。とりわけ、政府による「教団管理制度」(p.66)の施行と教団改革への取り組みが主たるテーマである。

時の指導者ムハンマド・アリーは中央集権支配の確立と富国強兵を目指した政治改革だけでなく、宗教制度に関してもその管理・統制を強める政策を推進した。その中のひとつが、「スーフィーの名家として絶大な宗教権威をもっていたバクリー教団導師を利用する」(p.67)形で、国内の教団を統括すべく設けられた教団管理制度である。政府はバクリー教団導師を通して、教団の人事・財政・活動など、あらゆる側面に行政権力を介在させた。一方、同制度は国家の名のもとに「教団側の既得権益を保護する役割」(p.70)も担っており、制度への参加はあくまで各教団の自発性に委ねられたものの、19世紀末までには主要な教団の取り込みに成功し、一応の完成を見る。

19世紀後半以降、イスラーム改革運動による批判を受けていたスーフィー教団の活動は、同時に西洋列強による批判にもさらされていた。こうした状況を受けた政府は、19世紀末以降、教団管理制度に対してさらなる改正を行う。とくに、スーフィー評議会の設置は、バクリー教団導師のみに依拠していた従来の管理体制から、国内すべての教団が政府の統制下に置かれる形式への変更を促し、教団を近代国家の官僚主義的な統治制度の中に組み込んだ(pp.78-79)。また、政府は新たに制定した教団内規によって、導師を頂点とする中央集権的な組織へ教団を再編しようと試みただけでなく、倫理や規律を重視する立場から、前近代の教団を特徴付けていた聖性や娯楽の排除を目指した(pp.82-83)。19世紀から20世紀初頭にかけて実施されたスーフィー教団への政策は、まさに教団の組織や活動を近代化させようとする取り組みであったのだ。

本書を締めくくる第5章は、政府による改革を経験したエジプトのスーフィー教団が20世紀初頭から今日に至るまでにたどった道程が論じられる。

19世紀以降に政府が推進した教団の近代化改革は、行政面で一部成果が見られたものの、教団側が改革の必要性を理解して自発的に取り組まなかった結果、十分な成果を生み出すに至らなかった(p.87)。また、多くの民衆は教団が提供する聖性や娯楽に依然として魅力を感じており、近代化とは相容れない信仰の排除を試みた政府も、民衆の支持獲得のためには、スーフィー教団に対して両義的な態度を取らざるをえなかった(pp.89-90)。

一方、都市部では教団の「衰退」とも理解できる現象が進んでいく。たとえば、教団が地域社会の中で担ってきた多様な役割は、世俗的な教育機関や慈善団体などに取って代わられてしまう。また、近代的な教育を受けた知識人にとっては、「教団の提供する信仰は、非合理的で後進的な前近代の遺物」(p.91)にすぎないのであった。

このように教団が社会(とくに都市部)の周縁に追いやられていく中、自発的に「その組織や活動を刷新し、近代社会に適合した新たな教団のあり方を模索する」(p.92)教団が現れる。20世紀初頭に創設されたハーミディー教団に代表される「改革派教団」は、当初から組織の集権化とヒエラルキー化、教義や宗教実践における規律化を重視しただけでなく、新規メンバーに対する組織的な勧誘戦略を実行し、教育や医療など現代的な社会サービスを提供するなど、人々の嗜好や関心に合わせてその活動形態を変化させる柔軟性を有していた(pp.95-97)。この改革派教団の試みは、近代的・世俗的な教育を受けた人々を取り込むことに成功し、その多くはエジプト全土に数万人規模の信徒を抱える教団へと成長する(p.92)。

こうした改革派教団の出現に加え、1970年以降に顕在化するイスラーム復興もまた、スーフィー教団の再生に重要な役割を果たした(p.97)。とりわけ、「イスラーム主義勢力への対抗勢力」として、「政府の見解に沿った『正しい』イスラームを人々に説く役割」を与えられたことで、現代エジプトにおける教団はその息を吹き返していく(pp.100-101)。現代のスーフィー教団は、近代化やさまざまな批判に翻弄されながらも、その時々状況に柔軟に対応しつつ、その命脈を保ち続けてきたのである。

以上見てきたように、本書はスーフィー教団をめぐる多岐に渡った話題について、簡にして要を得た説明を施している。他方で、紙幅の都合であろうが、その事例のほとんどをエジプトに拠ってしまった感は否めない。スーフィー教団の活動や民衆イスラームの実践はイスラーム世界で広く認めうる。本書を読了した読者が、次に専門書を手にとり、深遠なるスーフィズムの大海や広大なる民衆イスラームの沃野へと足を踏み入れてくれることを評者は願ってやまない。

<参考文献>

- 赤堀雅幸(編) 2008 『民衆のイスラーム——スーフィー・聖者・精霊の世界』(異文化理解講座 7) 山川出版社。
 ティエリー・ザルコンヌ(東長靖監修・遠藤ゆかり訳) 2011 『スーフィー——イスラームの神秘主義者たち』
 (『知の再発見』双書 152) 創元社。
 東長靖 1993 「スーフィーと教団」山内昌之・大塚和夫(編)『イスラームを学ぶ人のために』世界思想社, pp.
 69-85。
 —— 2010a 「スーフィズムの成立と発展」佐藤次高(編)『イスラームの歴史 1』(宗教の世界史 11) 山川出
 版社, pp. 155-195。
 —— 2010b 「スーフィー教団の革新と再生」小杉泰(編)『イスラームの歴史 2』(宗教の世界史 12) 山川出
 版社, pp. 68-97。

(丸山 大介 防衛大学校人文社会科学群人間文化学科・准教授)

佐原徹哉『中東民族問題の起源——オスマン帝国とアルメニア人』白水社 2014年 275+22頁

1909年4月、アナトリア中南部のアダナ州の各地で騒乱が発生し、数多くのアルメニア人がムスリム住民によって殺害された。この「アダナ事件」は、1890年代および第一次世界大戦中の事件とあわせて、オスマン帝国末期に生じたアルメニア人に対する一連の暴力のなかに位置づけられる。今日、「アルメニア問題」として知られるこうした事象は、その政治性ゆえに、トルコ、アルメニアにとどまらず、欧米諸国においても多くの関心を集めてきた。しかし、やはりその政治性ゆえに、客観的とはいいがたい「研究成果」が大量に発表されており、研究状況はむしろ混迷を増しているようにも思われる。こうした困難な研究課題に、比較的研究蓄積の乏しいアダナ事件の分析から取り組んだのが本書、『中東民族問題の起源——オスマン帝国とアルメニア人』である。本書は、著者佐原徹哉氏が2010年から2013年にかけて学術雑誌などに発表してきた6点の英文論文と、それをまとめた著書、*What Happened in Adana in April 1909?: Conflicting Armenian and Turkish Views* (Istanbul: Isis Press, 2013) に加筆し、修正を加えたものである。

日本の読者に向けて問題の所在を明らかにすべく追加された序章では、アルメニア人の処遇をめぐるオスマン末期に生じた三つの事件の概要が解説されている。そしてこれまでの研究は、それら事件の連続性を唱え、その原因をオスマン政府とアルメニア人のどちらかに帰する目的論的な性格を有しているとの理解が示される。さらに、これまでの議論には矛盾が多いことも指摘され、そうしたなかでアダナ事件に注目することが硬直化した議論に一石を投じることにつながるとの見通しが提示される。

第一章は、アダナ事件をめぐる研究状況を扱っている。この章ではアダナ事件を、青年トルコ革命を主導した統一派がアルメニア人排除を目的として仕組んだとする「統一派陰謀説」と、アルメニア人がヨーロッパ列強の注意を引くために引き起こしたとする「アルメニア人陰謀説」が展開されてきたことが論じられる。その後、それらの根拠とされる史料が有する問題点が入念に検討される。そして、「陰謀論が幅を利かせ」、「初歩的な史料批判すらなされない」研究状況と、こうした「陰謀論を離れて、ごく基本的な事実の確認から」アダナ事件を再検討していくという本書の姿勢が示される。

つづく第二章では、本書の舞台であるアダナ州特有の社会経済的背景として、19世紀に生じた変化が以下のように論じられる。19世紀前半までのアダナ州は、オスマン帝国内で最も開発の遅れた地方であり、いくつかの地方有力家系が影響力を誇示していた。こうした様相は、1860年代に中央政府がアダナ州に「改革師団」を派遣し、統制を強化したことで一変する。中央政府主導で開発が進められた結果、綿花を中心とした輸出向け商品作物産業が隆盛し、それは土地の集積に成功したムスリム地主を富ませるとともに、商業分野におけるアルメニア人の成長につながった。その一方で、定住化させられた遊牧民やアラブ地域からの労働移民、そしてロシア領から大量に流入し、土地を与えられた難民からなるムスリムの小農民は、やがて小作人へと没落していく。こうしたなか、下層に置かれた「定住遊牧民とムスリム移民」にとって、不満のはけ口として、経済発展の恩恵を受けたアルメニア人が浮上したとされる。